

# 相生町の婚姻について

民俗班（徳島民俗学会） 澤田 順子<sup>1)</sup>

## 1. はじめに

嫁入りは人生の転機である。自分の判断で結婚を考えることのできる現在と違って、かつて、嫁入りは、女性にとってどんな状況を生み出したかを調査したいと考えた。そこで、相生町の婚姻前後の状況を聞き取りすると共に、女性がこなした労働についても話を聞いた。嫁取りとは労働力を貰うことであった時代は遠い昔ではなく、今健在の70歳代後半・80歳代の人たちが経験したことであった。この年代の人たちのいわゆる結婚適齢期は、日中戦争や第二次世界大戦など戦争の影響が大きく、世間には男性が出征する前に結婚をさせておこうという風潮が漲っていた。物不足のため、質素な嫁入りの支度や婚礼をも強いられていた。モンペ姿の戦争花嫁も当時は当然と見られていたし、結婚してすぐ戦争未亡人になることもあった。結婚するや夫を戦場に駆り出され、結果、男性の働き手が家になくなった。こんな中で、若い嫁たちは一家の柱となり、この町の生業である山仕事や農作業を取り仕切り、牛を遣って田を耕したり、炭焼きなどの労働をした。今回の調査で、女性たちから当時の過酷な経験談も聞くことができた。

ここでは、消え去ってしまうであろう昭和30年代ごろまでの婚姻について、聞き取りをした報告をしたい。徳島県内、同様な婚礼のしきたりはあるが、山に囲まれた相生町の特色が出ればよいと考える。あわせて延野・日野谷・相生、3ヶ村が合併して現在の相生町を形成しているので、地域の違いも拾ってみたい。

## 2. 結婚に至るまで

### 1) 通婚圏

息子や娘が年頃になると親が近くの世話好きの人などに「息子（娘）にだれぞええ人はおらんで」と頼みに行く。世話人は家同士の釣り合いを第一に考え、相手を捜す。近くの素性のよく分った人、いとこや近所の人などが婚姻の対象になる場合が多かった。中には海部の赤松、日和佐、鷲敷（延野・日野谷地区）、勝浦・上勝筋（相生地区）から輿入れした人もあった。時代が進むにつれ通婚圏は広がっている。結婚はほとんど見合いであった。恋愛のことをトッピーと言ひ、二人で逃げた者もあったが、まれであった。たとえ結婚できたとしても、自由結婚のことをテテクリアイと言って非難の対象とした。

---

1) 徳島市丈六町長尾62-8

## 2) 見合い

相手との話が決まり、お互いに「良し」となると見合いをする。近所や親戚同士の場合はよく分っているので省略された。見合いは女性の家で仲人・両親同席で行われ、既に両家の意向は決まっているので形式的に行われた。

## 3) 熨斗入れ（結納）・タノミを入れる

世話人・本人・親兄弟がついて行くこともあった。

熨斗は目録・結納金に、酒（ビンで2本くらい）、二升鉢（ヨロコビ鉢、寿鉢ともいう。木製の塗鉢で白米二升入れる）、魚籠（タイ一対、カツオ、カツオブシなど）を添えて持って行く。娘の家では熨斗を床に飾る。受取りを書き男性方に渡す。いよいよ婚礼の日程を決める。

## 4) イキゾメ（足入れ）

見合いという形式を採らず、ノシイレより先に、嫁になるだろう家に着替えだけを持って行儀見習いに「女中」で入ることをイキゾメと言った。その家の家風に合うかどうか、家の人、特に相手方の母親の気に入るかどうかを試された。昭和23、4年ごろ、24軒の地域で結婚適齢者6、7人の内3人がイキゾメし（10日～20日間）、3人のうち1人のみが婚姻に至ったそうだ。話者の親の代では一般的なしきたりではなかったかということだ。養子も同様で、次男・三男は結婚前から手伝いに行くことが多かった。

たとえ女性が妊娠した場合でも、嫁として気に入らない時は、産まれた子を「子にやる」などして始末を着けた。それくらい家に合うかどうか親の意向が強かった。

## 5) ヨバイ（夜這い）

明治時代などにはヨバイもあったようだ。おなご衆を雇っている家には、糶すりなど農作業の手伝いをしに若い衆が来て、いんだ（帰った）振りをして朝まで居残っていたなどの話を聞いたことがあるという。

# 3. 婚 礼

## 1) 婚礼の行われた季節

婚礼は冬に行われることが多かった。秋の取り入れが終わり、麦を蒔いた後の農閑期、特に2月・節分ごろが良いとされた。冷蔵庫のない時代、寒い時期が魚や他の食材の保存が可能だったこともある。

## 2) 花嫁道具

第二次世界大戦前後は衣料品も国より割り当てられた切符でしか買うことができず、結納の時に女性側に衣料切符も添えて渡したという話もあった。

一般的な花嫁道具は、（三つ重ね）タンス（三棹）、下駄箱（一棹）、鏡台（一棹）、針箱、

夜具（二組みで二棹）、夜具入れ（二棹）、夏用・冬用座布団、蚊帳、たらいと手桶、バケツ、所帯道具など。「あの嫁さんの荷は○棹だった」と荷物の多さを競ったりした（荷物を担ぐ棒1本分を一棹という）。道具の中で重箱は必需品だった。

花嫁道具はカタイだり（担いで）、大八車、トラック（木材や木炭運び用、戦時中は木炭車だった）や、山仕事の多い雄<sup>おんどり</sup>などでは馬車でひいて行った。

### 3) 花嫁支度と花嫁行列

明治時代以来、現金を得る手段として養蚕が盛んに行われ、出荷されていた。残ったくず繭だけでなく、良い繭も家族の晴れ着用として糸を採り地絹の機織りをしていた。できた布は京染めにだした。花嫁衣装も上等の物が用意できた。

昭和14、5年ごろ日野谷の女子青年団では、黒モク（黒紋付、喪服と同じ）の下に白モク、緋モク（白の長着と赤の長着）を重ねることに花嫁衣装を決めたそうだ。帯は丸帯、髪は丸髷か高島田の日本髪に結いヤロウ（角隠し）を掛けた人もいた。その他、裾模様の着物とか、よそゆきの着物などと、家によって違っていた。戦時中の花嫁はモンベ姿だった。足元はポンポン下駄（ポックリ）や表付きの下駄を履いた。

行列は樽持ち、世話人、花嫁と付き添いの嫁付きさん（髪結い）、カブ内（藩政期の棟付帳に見られる本家、小家の関係で、先祖を同じくする一族）のオモヤ、親の兄弟、兄弟、等の本客の、取り方が決めた偶数の人数である。嫁付きさんは傘（蛇の目傘、こうもり傘）を持ち（夜でもさす）、他の人は提灯を提げる（昼は灯りを付けない）。遠路からだど、あらかじめ決められたオチツキノ家（気安い家か、カブ内の家）で休憩をする。上那賀から嫁入りした人は、提灯の灯りを頼りに夜道を徒歩で山越えしたという。オチツキノ家で着物を着直したり、履き物をワラゾウリから下駄に履き替え、嫁入りとなった。

婿は、昔は婿入りとして嫁の家まで迎えに行ってお馳走になり、やり方（嫁）の本客と一緒に帰ってきていたようだ。その後オチツキノ家までとか、家から外に出て花嫁を迎えるようになり、見物の人を含めた賑やかな行列で帰ってくるようになった。雇った芸者の弾く「引き込み」の三味線（よしこの、伊勢節等）に迎えられ、姑に先導され花嫁は家の「ニワ」（勝手口）から座敷に上がった。

嫁さんを見に来た女・子どもには嫁さん菓子（ふやき等）、大人にはタバコ（昔はキザミタバコをタバコ入れに詰めた）が配られた。

### 4) 三三九度と祝宴

婚礼の儀式と披露宴は取り方の家で行われ、費用も全て取り方で持つのが普通であった。婚礼の儀式は町内3地区ともほとんど同様の形式で行われている。式次第については既に発行されている書物（『昔のくらし・相生』、『相生町誌』）で紹介されているし、紙面の関係もあるので、ここでは流れのみを記述する。

表の間での「落ちつき」（軽い食事など）が済むと、仲人の司会で夫婦固めの盃事「三三九度」をする。親族の固めの盃の後、いよいよ宴会が始まる。花嫁も着替えて客にお酌をし、客は袴を脱ぐなど気楽な格好で飲み明かす。戦時中は酒は配給で自由に買えなかったが、婚礼には特別に二升配給された。それだけでは足らずヤミ酒を買ったりもした。

宴も酣になると、雇われた料理人の腕の見せ所で、大根の鶴亀など縁起物とご馳走をそう盆に載せた「ミズノモン」が、赤い大きな「トりの盃」と共に運ばれてくる。相生の婚礼では謡曲が場面場面で謡われている。仲人は三三九度の時「高砂」、「四海波」などを謡い、料理人も「トりの盃」で謡う。仲人を務める人は曲詩を扇子に書いていたという。

翌日、花嫁は姑に連れられ氏神様へ「初詣り」、近所や講組（組、相互扶助の隣保組織）へ「初歩き」、嫁さんの土産（風呂敷が多い）を持って行き挨拶をする。「ミツメ」（三日目）、嫁の実家の両親が挨拶に来る。五日目「初泊まり」で嫁の里に婿・両親共に行きご馳走になる。その他「若いし（衆）振舞い」「板場ながし」など世話になった人への労いや、仲間入りの祝宴が続く。

#### 4. おわりに

家族の一員となると早速に嫁の仕事が待っている。労働力を期待されての結婚であるから、重労働が始まる。林業の盛んな谷内では、材木を降ろすキンマ、炭焼きの手伝い、茅を刈ってコマシで織るスミダス（炭俵）作り、麦・稲の手入れなどをした。竹ヶ谷でも婚礼の次の日から台所の仕事をし、牛の世話、百姓仕事に追われている。その上、家族の食事や衣類の手入れ、舅や姑に仕え、夫に支え、小姑の世話、子育てもこなした。楽しそうに昔語りをしてくださる方々の、どこにそんな力があつたのだろうかと思う。

本調査にご協力くださった下記の方々に心よりお礼を申し上げます。

相生／湯浅裕氏（昭和6年生）請ノ谷、能登一敏氏（大正14年生）谷内、能登カズエ氏（昭和2年生）谷内、東浦武次氏（大正元年）竹ヶ谷、東浦重子氏（大正5年生）竹ヶ谷。

延野／藤原巧氏（大正元年生）吉野、中村竹雄氏（大正6年生）延野、西岡林蔵氏（大正6年生）雄、清水利明氏（大正6年生）雄、西田実氏（大正15年生）吉野。

日野谷／谷崎啓一氏（大正8年生）朴野、太田孝代氏（大正6年生）朴野。

聞き取り調査日・会場／7月29日午前 雄公民館、午後 東浦様宅。同30日午前 相生町役場、午後 能登様宅。10月27日午後 谷崎様宅。12月1日午後 徳島市。

#### 参考文献

『昔のくらし・相生町』相生町老人クラブ連合会編・発行、昭和61年1月30日

『相生町誌』相生町誌編纂委員会、相生町役場発行、昭和48年8月27日